

研究ノート

「地域調べ」の方法を探る — 中高教員のためのワークショップ —

安田直樹（県立荏田高等学校）

1 はじめに

2003（平成15）年7月29日～30日の日程で、  
国士舘大学文学部地理学教室主催の社会科教員  
のためのワークショップが「地域調べ」の方法  
を探るをテーマに行われた。ワークショップは、  
同教室がジオグラフィック・アライアンス（地  
理学の小中高大連携）の試みとして一昨年に始  
めたもので、今回が3回目の実施となる。昨年、  
一昨年は同教室の長谷川均教授が中心となっ  
てGISとRSを体験することを中心に実施され  
てきたものだが、今回は、児童・生徒が地域調  
査を行う際のヒントとなる題材を提供するこ  
とを主眼にした「地域調べ」がテーマに設定され  
た。地理学の小中高大連携の試みとしてのこの  
研修に参加して初めての報告をしたい。

2 ワークショップの内容

統計資料（一次資料）を使った「地域調べ」  
の方法（加藤幸治講師担当）、地域の植生景観の  
調べ方と読み方（磯谷達宏助教担当）、地図を  
用いた昔の地域の調べ方（岡島建助教授担当）、  
地域の気候環境の調べ方（野口泰生教授担当）  
の4つの講義・実習が行われた。

(1) 統計資料（一次資料）を使った『地域調べ』

統計資料を活用し考える力を養うヒントとし  
て地理学でよく使用する一次統計資料である国  
勢調査を例に、『地域調べ』に活用できる使い  
方が提示された。国勢調査による資料は比較的  
入手しやすく都道府県別、市町村別のデータが  
揃っているため『地域調べ』に活用しやすい。  
その中から地域の特色をつかむ一つの指標とし  
て、常住地・従業地統計が紹介され、それを使  
った『地域調べ』として新潟県長岡市周辺を例  
に地方都市における産地の崩壊（地場産業の解  
体）と地方都市の通勤圏の拡大が提示された。ま  
た、意外な地域性が分かる資料として全国消費  
実態調査が紹介された。その調査から、ぶどう  
酒の消費が一番多い山梨県を例に消費と生産の  
整合性が示され、そこから産地を支える「需要  
条件」、

産業集積と産業クラスターへと話が進み、  
経済地理学の最新の話題の一つである産業ク  
ラスターについて興味深い話を聞くことが出来  
た。最後に様々な統計資料と統計資料の入手  
方法、入手場所が紹介され講義は終わった。

(2) 地域の植生景観の調べ方と読み方

植生の全体的な特徴や孤立木、並木など人  
間にとっての風景でもある植生景観を調べるこ  
とにより地域的特色がでるといふ。その植生景  
観を読むことの意義として次のようなことが示  
された。植生景観は、地域性豊かであり、地域  
の特徴として重要である。自然条件も人為作用  
も地域によって異なる。人間-自然関係の歴史  
の結果が現れている。地域特有の雰囲気や風俗  
、アメニティーなどを醸し出す要素として重要  
であり、住民の生き甲斐、住宅地や観光地とし  
ての質の向上など地域の発展性と関連する。地  
域の生物多様性保全の基盤として重要である。

次に現地調査の必要性について話があった。  
地形図から読み取ることが出来る植生景観は、  
針葉樹林、広葉樹林といったおおまかなもので  
広葉樹林といっても落葉広葉樹林と常緑広葉樹  
林との区別はできない。また、自然林か二次林  
の区別も出来ない。そこで、現地調査によって  
植生景観を把握する必要性が出る。調査方法  
の講義を受けた後、実際に国士舘大学世田谷  
キャンパス周辺の調査を行った。

実地調査では、コナラ、シラカシ、クヌギ、  
スダジイ、ケヤキなど関東地方平野部の森林  
植生を理解する上でキーとなる樹木を中心に樹  
木の種類、高さ、幹の太さと森林の最上層にお  
ける優占種は何かなどを調べた。その結果を地  
図の中に記録し植生景観図を作成した。

実習後の講義では、植生景観の読み方とし  
て、植生のタイプの分布や構造からわかること  
、孤立木や並木の種類・大きさ・分布からわか  
ること、過去の地形図や植生図から読み取った  
情報と比較してわかること、総合的な観察の  
着眼点が提示された。最後に様々な植生情報  
とその入手方法が紹介され講義は終わった。

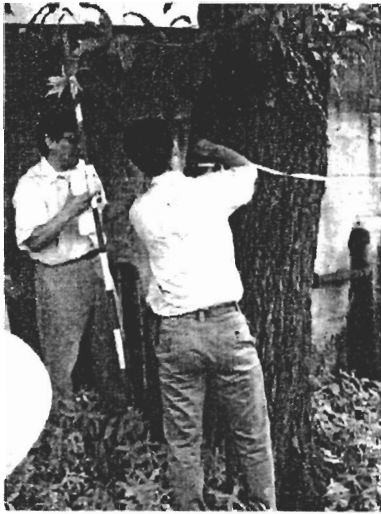


写真1 木の幹の太さを測っている様子

### (3) 地図を用いた昔の地域の調べ方

明治期に測量され作成された旧版地形図の紹介と読み方の講義から始まった。その後、旧版の地形図を用いて地形や集落の分布、道路の様子を現在の地形図と対比させながら変化を読みとる作業を行った。世田谷及びその周辺の旧版地形図を使って、北澤用水、烏山用水、品川用水をそれぞれ着色し、江戸期に作られたこれら3つの用水の違いを確認した。その結果北澤用水と烏山用水は台地の縁に沿って自然の地形を利用して作られたのに対し、品川用水は台地上に人工的に作られたものであるということが読みとれた。また、旧大山街道沿いの集落の確認などを行った。講義の最後には、様々な地図資料の紹介や旧版地図の入手方法、活用の仕方などが話された。

講義と作業の後は、大学周辺のミニ巡検を行い、烏山用水を暗渠化し下水道幹線に転用した地上部に作られた緑道、世田谷城趾、世田谷代官屋敷などを見学した。

### (4) 身近な気候環境の調べ方

気候の特色をつくりだす気候要素のうち特に地球上の生物集団の分布を決める大事な気候要素である気温と降水量の観測機器と観測方法の講義がなされた。観測機器は、実物を用いて使い方などが提示された。

観測方法については気温観測を例に測定法と測定機器の使用法、注意点の説明がなされた。特

に移動観測をする際の注意点等に関する話は、児童・生徒が気温観測する際の留意点がよくわかりとても参考になった。また気温観測によって得られたデータの活用方法も示された。

地域の気候調査の例として多摩丘陵東部の小起伏地で気温観測から気温分布、気温の時間を読みとる方法が示された。観測結果から得られた谷と尾根の気温差から、斜面の温暖帯（サマルベルト）と冷気湖の存在が明らかになった事例は興味深いものであった。また、気候と扇形樹の関係や風土産業など地域の気候調査を行う際の様々なヒントが提示された。さらに、等温線の描き方の実習を行い、講義は終了した。



写真2 講義の様子  
(国士館大学文学部地理学教室写真提供)

## 3 おわりに

今回の研修に参加して、児童・生徒にとって興味を引く地理学の授業を展開していくための多くのヒントを得ることが出来たと思う。考える力を養うためにも地理学が果たす役割は大きいと思うが、逆に最近は地理離れが進んでいて地理の教員として何とかしなければという気持ち強い。今回の研修は、地理学の小中高大連携を図る試みとして今後も大いに期待できるものであったと思う。国士館大学文学部地理学研究室のスタッフに感謝するとともに、その活動には今後も注目していきたいと思う。なお、同研究室の活動等については、ホームページで紹介されている。アドレスは次のとおりである。  
<http://bungakubu.kokushikan.ac.jp/chiri/index.html>